The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	西田哲学のパスカルへの共感
Author(s)	森川, 甫
Citation	Gallia. 1971, 10-11, p. 294-305
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/11562
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

西田哲学のパスカルへの共感

森　川　　甫

西田哲学の壮大な体系が博士の生涯にわたる深い思索と体験によるものであることは，論ずるまでもないことであろう．高坂正顕博士は西田幾多郎博士の明治30年1月3日の日記に記されていた言葉，「Philosophie : Deutsch, Griechisch, Englisch. Religion : Buddhaismus (Christuslehre). Sprache : Deutsch, Englisch, Chinesisch, Japanisch, (Lateinisch)」[1] に注目し，「正月三日の日記に，わざわざこの数語を書かれた先生は，少なくとも哲学，宗教，語学の三つをこの明治三十年の研究の中核と定められたことを，それによって自らに覚悟せしめていられるのであろう.」[2] と述べて，語学，宗教，哲学の三つを中心にして，西田博士の日記をたどり，その魂の動きにふれようと試みている．外国語に強い関心をもち，それを駆使して，西欧の文学，哲学書をひもといている姿が日記を通して随所にうかがえるし，また，後年になるほど哲学への関心が強くなっていることも見出される．しかし，生涯のすべての時期を貫いているのは宗教的関心であろう．明治31年の日記を見ると，「一月一日七時半晨起．十時頃独参．僧堂ニテ昼飯ヲ喫ス．午後ト夜ハ坐禅．一月二日朝暗キ中ヨリ起キテ坐禅．午前ハ宝山君ヲ訪フ．午後ト夜トハ打坐．一月三日八時晨起．午前天授ニテ文器禅士ト語ル．器曰ク，十六年猶悟入シ得ザリシ者アリ．余竦然毛髪ヲ立ツ．余モ亦之ノ徒タルナキヲ得ンヤ．已ニシテ以為ヘラク，好シ一生悟入ジ得ザルモ致シ方ナシ．左程ノ鈍物ナレバ他ノ事ヲナシテモ同ジ事ナレバナリ．霊運和尚モ廿年終ニ悟リ得ズト宝山君ト話シキ.」[3] 日記のいたるところに「夜ハ打坐十一時マデ」，「十二時マデ打坐」，「午前打坐…夜打坐」な

どの語が見られ，「只管打坐」の修業生活のさまがうかがえるのである．

仏教と共に，キリスト教も重視され，聖書を学び，キリスト教の思想家に親しまれている．パウロの「既にわれ生けるにあらず，基督我にありて生けるなり」の一句はしばしば引用されているし，「ストーカル氏のポール伝をかりて帰る．ポールの伝をよむに其猛烈の気象誠に感歎すべし．耶教の今日あるは実にかの如き人物ありしが為なり．」（明治34年4月25日）「しきりにアウグスチンの書をよみたくてたまらぬ．」（37年1月3日）などの日記からキリスト教への強い関心がよくうかがえるであろう．久山康教授は『西田哲学とキリスト教』の中で，キェルケゴールが22才の時，ギーレライエへの旅で記した有名な日記の言葉を引用した後，西田博士とこのキリスト教思想家の生き方の類似性を示し，さらに，西田博士はキェルケゴールに欠けている重要な点を具えているのではないかということを指摘されている．まず，キェルケゴールの日記から引用すると，「私の使命を理解し，神の本来欲せられていること，即ち私が当為をもっていることを知ることが大切なのだ．私にとって真理であるような真理を発見し，私がそのために生きそして死ぬことを心から願うようなイデーを見出すことが必要なのだ．いわゆる客観的真理を探し出しても，それは私に何の役に立つだろう．つまり哲学者達の作った体系を徹底的に研究し，求められた場合には，それについて検討して，その各々の体系の内部にある矛盾せる諸点を指摘し得たとしても，それは私にとって何の役に立つだろう．……キリスト教の意義を説明することができ，その沢山の個々の現象を解明することができたとしても，そのキリスト教が，私自身と私の生活にとって，もっと深い意味をもっているのでないならば，それは私にとって何の役に立つだろう．……私に欠けていたものは，ほんとうに人間らしい生活を営むということだった．つまり単に認識の生活を営むことではなかったのだ．このようにしてこそ私は，自分の思想の展開をいかなる場合にも，私自身のものでないものの上に，然り，客観的と呼ばれているものの上に基礎づけることなく，私の生存の最も深い根源とつながっているものの上に，即ちそれによって私が神的なものの中にいわば根を下しており，たとえ全世界が崩れ去ろうとも，しかもそれにしっかりつかまって離れないそのものの上に基礎づけることができるのだ．私に欠けてい

るものはまさにこのことなのだ．だから私は努力してそれを求めるのだ．……要するに重要なことは人間のこのような内的行為，人間の神に関する側面であって，認識の量ではないのだ．」久山教授は次の如く云われる．「これらの日記を読み合わせるとき，西田先生の生き方とキェルケゴールの生き方には相通じるもののあるのを認めずにはおれない．西田先生の生き方はキェルケゴールと同じように，最も厳格な意味で実存的といえるであろう．しかしそこには実存的という言葉ではなお足りぬ或る物のあるのを感じさせられる．それは実存という言葉には，先生の継承されている『只管打坐』のような伝統的な修行の道の備わっていないことである．行のないことである．そのため真理を自得することが極めて困難となったのではあるまいか．私はキェルケゴールが，キリスト教の歴史にも類比の少ない尖鋭さと深刻さをもってキリスト教の何たるかを解明し，透徹した感銘深い信仰の講話を書きながら，しかもなお信仰を自己の生活に於て生きておらず，いまだ完き姿においてキリスト者となっていないという痛刻な自己認識をもっていたことに，深い畏敬の念をもつものであるが，それにも拘わらず，この信仰の自得の困難は，近代のキリスト教の伝統的な修道生活よりの離隔に原因があるのではないかとも想像されてならないのである．」[4] 同教授はさらに次の如く指摘される．「西田先生のこのキェルケゴールやドストイエフスキイへの同感，そしてそれは先生の著作中八十回を越えて，最も数多く引用されているアウグスチヌス，二十数回にわたって引用されているパスカルへの理解と共感を見ると，先生の思想が禅を基調とするものであるにも拘らず，意外に深くキリスト教思想との折衝の中で形成されており，晩年に至れば至る程キリスト教への関係が深まっていることを，私たちは確認せずにはおれないのである．」[5] それではアウグスチヌスと共に西田博士の著作全般にわたって引用されているパスカルの思想はどのように用いられているであろうか，この点を次に見てゆきたい．

II

パスカルの思想は西田博士の著作の中では強い共感をもって取扱われている．博士の引用しているパスカルの『パンセ』の断章に「考える葦」(fr.347)[6] が

ある．「人間は自然のうちで最も弱い一茎の葦にすぎない．しかしそれは考える葦である．これをおしつぶすのに，宇宙全体は何も武装する必要はない．風のひと吹き，水のひと滴も，これを殺すに十分である．しかし，宇宙がこれをおしつぶすときにも，人間は，人間を殺すものより一そう高貴であるであろう．なぜなら，人間は，自分が死ぬことを知っており，宇宙が人間の上に優越することを知っているからである．宇宙はそれについては何も知らない．」

この断章を述べる前に，『パンセ』と呼ばれるキリスト教弁証論においてパスカルは人間の現実の状態が悲惨にみちていることを示している．空間においては「いわば宇宙の一隅に迷いこんだように，誰が自分をそこに置いたのか，自分が何をしにそこに来たのか知らない．」(fr. 693) 時間においては，「この世の生の時間は一瞬にすぎず」(fr. 195) その短い一生の期間が「その前と後につづく永遠のうちに没し去っている．」(fr. 205) 空間においてさ迷い，時間において空しく，惨めな人間は「些細なことに悩まされる．」(fr. 136) 真理と善を求めようとするが，「真理についても，善についても無力である．」(fr. 436) 根底において人間は悪と誤謬にみちており，一方でわれわれの認識能力が真理をとらえようとしても，他方ではわれわれは真理から遠ざかる．悪がもたらす人間の悲惨の極致は死である．「人間の所有する一切のものが流れ去るのを感じるのは，恐しいことである．」(fr. 210)

人間を不可解なものにしており，「人間はそもそもいかなる怪物であろうか．」(fr. 434)「何という奇妙，何という怪異，何という渾沌，何という矛盾にみちたもの，何という驚異であることか！」(fr. 434) とパスカルに叫ばせているのは，人間が自己の悲惨を知りうる思惟をもつ，唯一の特権的存在だからであろう．「考える葦」の断章はこの点を極めて適確に表現している．この断章は西田博士の著作ではいかなる箇所で用いられているだろうか．

独創的哲学書であり，西田哲学体系の出発点となった『善の研究』は西田博士が42才の著作であるが，この書の「第三章　意志の自由」にまず引用されている．「意識には必ず一般的性質の者がある．即ち意識は理想的要素をもつてゐる．これでなければ意識ではない．而して此等の性質があるといふことは，現実のかかる出来事の外更に他の可能性を有して居るといふのである．現実に

して而も理想を含み，理想的にして而も現実を離れぬといふのが意識の特性である．真実に云へば，意識は決して他より支配される者ではない，常に他を支配して居るのである．」（第一巻 p.116）と意識の特性を論じて後，パスカルの「考える葦」を引用して意識の自由を述べている．「意識の自由といふのは，自然の法則を破つて偶然的に働くから自由であるのではない，反つて自己の自然に従ふが故に自由である．理由なくして働くから自由であるのではない，能く理由を知るが故に自由であるのである．我々は知識の進むと共に益々自由の人となることができる．人は他より制せられ圧せられてもこれを知るが故に，此抑圧以外に脱して居るのである．更に進んでよくその已むを得ざる所以を自得すれば，抑圧が反つて自己の自由となる．…(中略)…パスカルも，人は葦の如き弱き者である．併し人は考へる葦である．全世界が彼を滅さんとするも彼は彼が死することを，自知するが故に殺す者より尚しといつて居る．」(同,pp.116-117)「意識の根抵たる理想的要素，換言すれば統一作用なる者は，嘗て実在の編に論じた様に，自然の産物ではなくして，反つて自然は此統一に由りて成立するのである．こは実に実在の根本たる無限の力であつて，之を数量的に限定することはできない．全然自然の必然的法則以外に存する者である．我々の意志は此力の発現なるが故に自由である．自然的法則の支配は受けない．」(同,p.117）このように意識の自由を説明するために「考える葦」を用いている．

次にこの断章が用いられているのは，博士が54才のとき出版された『芸術と道徳』である．この著作の「感情の内容と意志の内容」の章では，「具体的真実在は自発自展的であつて，所謂内容と作用とは離すことのできない両方面である．」（第三巻，p.289）「具体的真実在は作用自身の無限なる連続である．作用の作用の立場とは我々が内に体験することのできる自由意志の立場であつて，かかる作用の内容として成立する実在は，その本質に於て自由であると考へることができる．自由とは超自然的といふことを意味するのである，自然的因果律を超越することを意味するのである．」(同,p.289)「独立自由の実在にも，種々の階級のあることを許さねばならぬ．作用の作用にも，種々の程度のあることを認めねばならぬ．」（同,p.289）と述べて，知覚，想起，想像と漸次，作用の創造性は明らかとなり，「唯自覚作用に至つて始めて作用が全然その対象界

を超越して己自身の対象界を創造することができ，真に作用の作用たる具体的立場に立つと云ふことができる．所謂自然界はその中に含まれて，唯その一象面を成すに過ぎないのである.」(同,p.290) と述べて，パスカルの「考える葦」の断章が「実に這裡より出で来るのである.」と云って，「此立場に於て客観界は全然自我の所作となり，之と共に相対的自我は消磨されて客観界の中に没入するのである.」(同,p.290) と書かれている．

同じ『芸術と道徳』の「法と道徳」においては，道徳的意志に対してその環境となるものは，単なる自然ではなく，真に道徳的意志の環境となるものは，人格的世界でなければならぬと説き，「全宇宙を以て我を圧殺するも，我は之を知るが故に殺す者より尊いとパスカルの言ふごとく，道徳的意志に於ては，自然を超越して自己自身の創造に成る対象界を有つと考へることができる.」(同,p.507) と述べ，さらに，「道徳法とは，かくの如く自分で自分の環境を生み，自分自身を特殊化して行く霊的生命の種属である．此故に道徳法は一面に於て生物学的法則と，その性質を同じくすると考へ得る．機械的法則と同一の意味に於ての一般的法則は，成立することはできない．若し機械的法則と同一の一般法に従ふものとするならば，生命はなくなるのである．法を敬し法に従ふと云ふ時，我々は之によつて始めて道徳的生命を得るのである．因果律が自然界を与へる如く道徳法は道徳界を与へるのである．唯，道徳的意志の世界は，自然界と異なつて個性的実在の世界である．道徳法の一般法は，抽象的一般ではなく具体的一般でなければならぬ．道徳法は単に従ふべく与へられるのではなく，之によつて個性的生命を構成すべく与へられるのである.」(同,pp. 507-508)

悲惨な状態にある人間を，「知る」ことによって偉大にするパスカルの思惟も単なる思弁にとどまらないで，道徳，倫理と結びついている．「われわれはよく考えるようつとめよう．そこに道徳の根源がある.」(fr. 347) このようにパスカルの思惟が「意識の自由」「自覚作用」「道徳的意志」において共感をもって西田博士によって用いられているのである．

西田哲学の中ではしばしばパスカルのサンチマン sentiment に言及されている．パスカルのサンチマンは人間を知る「繊細の精神 esprit de finesse」

であり，また神を知る「心情 cœur」である．パスカルにおいて「繊細の精神」と対立するのは「幾何学的精神 esprit de géométrie」である．この二つの精神については『パンセ』に次の如く述べられている．「幾何学的精神と繊細な精神との違い．—前者においては，原理は明白であるが，しかし通常の使用から離れている．したがってその方面へあたまを向ける人はあまりいない．慣れていないからである．しかし少しでもその方へあたまを向けるならば，完全にそれらの原理を見てとることができる．ほとんど見のがすことができないほど大きなそれらの原理について，誤った推理をする人があるならば，よほど精神がどうかしている人にちがいない．けれども繊細な精神においては，原理は通常使用されており，すべての人の眼の前にある．あたまを向けるまでもないし，努力する必要もない．ただ問題は，よい眼をもつことである．眼を利かさなければならない．なぜなら，この方の原理はきわめて微妙であり，数も多いので，ほとんど見のがさないことが不可能なくらいだからである．ところで，原理を一つでも見落せば，誤謬におちいる．だから，すべての原理を見てとるためには，よく澄んだ眼をもたなければならない．」(fr. 1) このような「幾何学的精神」とは理性であり，これによって自然を十分に探究することができるだろうが，「宇宙の栄光にして，宇宙の屑」(fr. 434) である，偉大と悲惨が奇妙に混合した人間を十分知ることはできない．人間を知るにはその「原理がきわめて微妙で数多い」「繊細の精神」をもたなければならない．理性によって科学的真理を知り得るが，宗教的真理は知り得ない．「われわれが真理を知るのは，ただ理性によってのみでなく，また心情によってである．この後者によって，われわれは第一原理を知る．」(fr. 282)「神を感じるのは，心情であって，理性ではない．信仰とはそのようなものである．理性にではなく，心情に感じられる神．」(fr. 278) このようにパスカルのサンチマンは「繊細の精神」として人間を知り，あるいは，「心情」として神を感じるのである．

さて，パスカルのサンチマンは西田博士の著作の中でどのように引用されているであろうか．博士が63才のとき出版された『無の自覚的限定』の「場所の自己限定としての意識作用」の中で，「私は自己は自己を知るものであると考へるのである．知るものが知られるといふのは矛盾と考へられるであらう，併

し矛盾と考へられる所に，真の自覚の意義があるのである．私は哲学は一種の否，真の人間学の意味を有つて居ると云つてよいと思ふ．併しそれは自覚的人間学でなければならない，外的人間 homo exterior の学ではなくして内的人間 homo interior の学でなければならない．」（第六巻，p.112）と述べて，パスカルに言及している．「例えばパスカルの人間論といふ如きものは真に我々の深い自覚の事実に基いたものである，自己自身を直視したものである．デカルトの cogito の意味を真の自覚の立場に深めたと云ひ得るであらう．無論，それは対象認識といふ意味に於ての知識ではない，Connaissance par le coeur である． sentiment の事実である．併しそれは所謂感覚や感情の事実といふものでもなく，又芸術的内容の了解といふ如きものでもない． それは『有るもの』の知識である， 苟も自己自身を自覚するものの認めなければならない知識である．」(同p.113) また，デカルトからメーヌ・ドウ・ビランへの発展の方向を考えて次の如く述べている．「デカルトは自覚によつて真実在を考へ，又それによつて直覚的知識といふものを明にした．デカルトの自覚は知的自覚であつたと云ひ得る．所謂デカルト哲学はこの方向に進んだ．併しデカルトの自覚からメーン・ドウ・ビランの j'agis, je veux, ou je pense en moi l'action といふ方向に進むこともできるであらう．かかる自覚の方向に踏み出したのがパスカルであつた．フランスの哲学にはかかるサンチマンの哲学の流がある．」（同p.114）「カントの意識一般はフィヒテに於て超越的意志として又形而上学に陥つた，ノエシス的限定としてサンチマンの方向に見るべきものをノエマ的方向に対象化したのである．ヘーゲルの弁証法に至つて意識一般の自己限定といふべき対象的限定そのものが，ノエシス的限定として直に sentiment intérieur の意義を有つに至つたと云ひ得るであらう．対象的限定そのものの背後に直にパスカルがサンチマンによつて自己自身の底に見た自己矛盾が見られたのである．」（同，pp.114-115）パスカルの人間論は自覚的人間の人間学であって，ここでいう自覚とは sentiment による自己認識であり，パスカルはこの sentiment によって自己が矛盾的存在であることを知るのである．

人間が自己矛盾的存在である点に関しては，66才のとき出版された『哲学論

文集』の「二，実践と対象認識」にも次の如くパスカルが引用されている．「我々は此に我々の身体的存在を有ち，我々の生命はかかる行為的直観の現実を中心として弁証法的に動いて居るのである．故に我々人間はいつも自己矛盾的存在である．パスカルのいふ如く人間はいつも両極端の中心にあるのである．彼は又云ふ，この岸へかの岸へと押し戻されつつ，我々は無辺の中間に浮び，果しもあらず漂ひまよふと（Pensées 72）．我々の生きる方向は，唯，弁証法的に物を見て行く，即ち行為的直観的に創造し行くにあるのである．」（第八巻，p.428）人間があてなく漂う中間者であって，自己矛盾的存在であることを示し，「真に具体的対象の自己限定として考へられるヘーゲルの弁証法はパスカルが自己自身の底に見た自己矛盾の事実でなければならない．」(同，p.116）と述べ，「哲学は我々の自己の自己矛盾の事実より始まるのである．哲学の動機は『驚き』ではなくして深い人生の悲哀でなければならない．」(同，p.116）哲学が「人生の悲哀」という人生の根本問題を動機としていることが説かれている．

また，同じ『無の自覚的限定』の「私の絶対無の自覚的限定といふもの」においては，「私はデカルトと共に知識の根抵をコギト・エルゴ・スムに求め，知識はそこから始まると考へたいと思ふ．」（同，p.172）と述べて，さらに進んで，「私はデカルトのコギトをデカルト自身の考へた方向よりはパスカルのサンチマンの方向に考へることによつて，真の自覚の意義を明にし得ると思ふ，そしてそこに真に知識の基礎があると考へるのである．」（同，p.177）と記されており，パスカルの sentiment への共感が顕著に見られるのである．そして，博士が64才のとき出版された，『哲学の根本問題，続篇』の「二，弁証法的一般者としての世界」では，「我々の人格そのものが深き自己矛盾でなければならない．唯我々は自己自身を否定して現実の世界の底に絶対者の声を聞くことによつてのみ生きるのである．我々から絶対者に到る途はない．神は絶対に隠された神である．我々が行為によつて物を見るといふ方向へ，何処まで行つても神に撞着するのではない．パスカルの云ふ如く，内と外と結び附く，唯我々は跪いて祈るあるのみである．併し信仰は妄想や夢幻でないと共に単なる情操でもない．それは無限の活動でなければならない．」（第七巻，pp.426, 427）

パスカルは sentiment によって人間が悲惨と偉大の混合した奇妙な存在であることを知り，またその底にいやし難い悪，罪を認め，これを出発点にして宗教的世界に入り，うめきつつ神を祈り求めるのであるが，こうしたパスカルの思想が「自己矛盾的存在」を自覚し，その底に深い「人生の悲哀」を悟り，「自己自身を否定して現実の世界の底に絶対者の声をきくことによつてのみ生きるのである」という如く，西田博士によって共感をもって語られているのである．

パスカルの「いたるところにその中心をもち，どこにも周辺をもたない一つの無限の球体である．」(fr. 72) という断章は「絶対矛盾的自己同一」の説明に用いられている．西田博士が64才のとき出版された『哲学の根本問題』の「二，私と世界」では「個物は個物に対して限定せられ，絶対に相反するものの自己同一として個物と個物との相互限定が考へられるとするならば，我々の人格的生命といふものは現在が現在自身を限定するといふ意味に於て考へられるものでなければならない．それに於ては過去と未来とは現在に於て結合して居ると考へることができる．我々は無限の現在から出て無限の現在に還り行くと考へることができる．そこに真に死することによつて生きるといふ意味があるのである．真に過去未来を包むものは単なる無限大の極限球といふ如きものではなくして，パスカルの所謂周辺なくして到る処が中心となるものでなければならない．」(第七巻，p. 138) 高坂正顕博士は『西田幾多郎先生の追憶』の「絶対矛盾的自己同一」の中で，「西田先生にとつて重要なのは，かかる矛盾的自己同一が単に宗教上の悟りといはるべきものに尽きないことである．それは単なる悟りではなく，あらゆる実在の根本の在り方であり，人生の深い真相である．宗教上の苦悶と救済もそこにあり，歴史に於ける危機と創造もそれに基く．」[7] また，「先生にとつてそれは何よりも，現実の世界そのものの構造なのである．凡そ現実の存在は，単なる自己同一でもなければ，また単なる自己矛盾でもない．ではなくして両者の綜合であり，即ち絶対矛盾的自己同一なのである．存在するものは，現実的であればあるだけ矛盾的自己同一であるのである．そのことは物質の世界から生命の世界，更に歴史の世界から宗教の世界に深まることによつて益々明瞭になるのである．」[8] このように西田哲学の重要な概念であ

る「絶対矛盾的自己同一」を説明するさい，西田博士はパスカルの「いたるところにその中心をもち，どこにも周辺をもたない一つの無限の球体」が用いられているのである．

以上の如く，悲惨の中で人間を偉大にする思惟が述べられている「考える葦」の断章が自覚作用として自己の対象界を創造する意識の説明に用いられており，また，パスカルの sentiment を介して人間を知り，あるいは神を感じることができ，人間が自己矛盾的存在であり，そこに深い「人生の悲哀」があることが指摘されている．「いたるところにその中心をもち，どこにも周辺をもたない一つの無限の球体」の一句は実在の根本的在り方としての「絶対矛盾的自己同一」を説明するのに用いられている．

西田博士とパスカルの深遠な思想の内的折衝に関する研究は後日に期したいと思うが，以上の比較対照だけでもってしてもパスカルの思想が西田博士によって高く評価され，強い共感をもって引用されていることが明らかであろう．ここから偉大な両思想家の類似性を思わしめられ，共に人生の実相にふれ，その思想が深い宗教体験に支えられていることに注目せざるをえない．既にその日記を通して見た如く西田博士は，「只管打坐」の禅の修道に励んでいるし，パスカルも「火」[9] の自らの上にくだるのを感じ，イエス・キリストとまみえる宗教体験をしている．両者の深い宗教体験がそれぞれの取扱う問題を永遠の問題に関わるものにし，ここに西田博士がパスカルを強い共感をもって，著作活動の生涯の殆んどあらゆる時期に引用した大きな理由があるのであろう．西田幾多郎博士の思想には人間の偉大さと悲惨の認識および絶対者への畏敬の念が見られるがこれは正にパスカルの『パンセ』の主題である．

注

1)『西田幾多郎全集』(以下『全集』と記す.)(岩波書店)，昭和40—41年，第十七巻，p.3.

2) 高坂正顕著，『西田幾多郎先生の生涯と思想』(弘文堂書房)，昭和22年，p.29.

3)『全集』第十七巻，p.23.

4) 久山康，『西田哲学とキリスト教』（「関西学院大学創立八十周年文学部記念論文集」所収），pp.24—26.

5) 同上，p.52.

6) *Oeuvres de Pascal* dues à MM. Léon Brunschvicg, Pierre Boutroux et Félix Gazier, Paris, Hachette, (Les Grands Ecrivains de la France) 1904—1914 を用い，『パスカル全集』（人文書院），昭和34年，を参照する．断章番号は，以下 fr. でもって示す．

7) （国立書院），昭和23年，pp.53—54.

8) 同上，pp.54—55.

9) *Oeuvres de Pascal*, t. 4, ≪*Le Mémorial*≫.

（M. 37.　関西学院大学助教授）